



浄土真宗本願寺派 慈雲山龍溪寺 奏庵

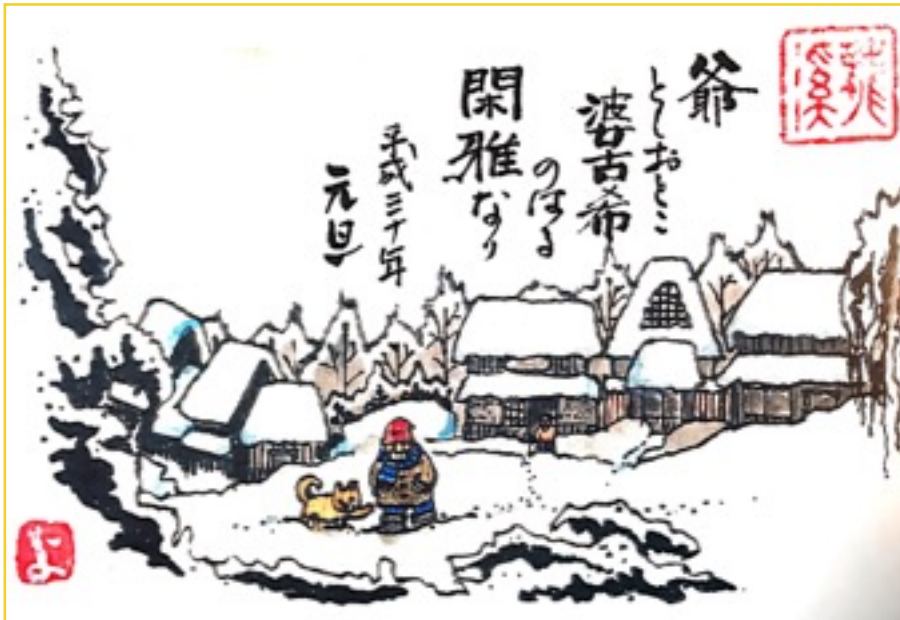
2018.1.20 発行 kanadean No. 295

かなであん

249-0002 逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

http:// kanadean.net mail: ryukeiji@kanadean.net



## こころとからだを

### つなぐもの

新しい年がスタートしました。平成と呼ぶ最後の年となるようですが、皆さまにはどのような年明けでしたでしょうか。

\* \* \*

自分が悪性リンパ腫ということがわかってから3年あまりが過ぎました。その間、入院、通院での抗癌剤治療、月々の検診の日々は、自分の命の中に病もあり、それを含めた細胞を離れて自分は存在しないことを実感させてくれるものになっています。

通院で受けた3週間毎の化学治療は、まず血液検査からはじまり、その結果を受ける診察を経ての抗がん剤投与は長時間を要し、その間、色々なことを考えさせ、本を手にする時間を与えてくれました。

その中で手にした、【がん哲学外来へようこそ】という樋野興夫医師の著書にあったのが、

『がんには悩みがつきものです。たとえば、同じ「胃がん」でも、患者たちが抱える悩みはそれぞれに異なります。本人だけでなく、家族もがんじがらめになっていることも多く見受けられます。

悩むことは決して悪いことではありません。がんを機会に、じっくり、大いに悩み、考えることは人生を豊かにすることにもつながるからです。

しかし、問題と思われるのは、悩みが治療を妨げてしまっているケースです。……』

このことばは、私に親鸞聖人のご和讃を思い出させました。病気の治療も人生の生き方も同じ、疑いのない「よりどころ」を必要としていることです。

入院直後には呼吸不全や極度の脱水のため厳しい緊急処置が必要でした。その治療を考える間もなく受けながら、これも、その時その時疑いも迷いもなく自然におまかせで生きる日々と何ら変わらないと思えてきました。病気の時には医師や看護師、医療環境の助けをいただきながら、生きるということ「いのち」という存続を目指すという人生の時間に何も違いはないのです。その変わらないと思える日々に、お念仏のみ教えがあり、私と家族にとって、何ものにもかえがたい「よりどころ」であったことにあらためて頷かされました。

**一切の功德にすぐれたる、南無阿弥陀仏をとனால்、三世の重障みなながら、かならず転じて軽微なり。**

三世の障りとは、ああしていなければ、こうしていれば、こんなことをしては手遅れになるのじゃないか、他にもっと楽でいい治療があるのでは、という迷い疑いでしょう。まるで人生に困った時の練り言と同じです。「自分だけが」が、その歩みを妨げ人生を無駄にしてしまいます。「なくなってしまうのではなく、軽くなる」と謳われた親鸞聖人の和讃が、時にやわらかく、力強く心に響きます。人生は、重い荷を軽く背負って、その時その時生かされるままに応じて歩む時間の積み重ねです。そのことを、今私に至り届いているお念仏とともに味わってまいりましょう。 合掌

奏庵法座  
平成30年度初法座

日時  
1月26日(金)  
午前11時～

「真宗宗歌」  
正信偈  
住職法話  
ご文章拝読  
「恩徳讃」  
～\*～  
おとき

年が改まれば抱えているものが真っ新になるわけではありませんが、そう思わせてくれるような澄みわたった美しい年明けでした。毎月の1ヶ月に変わりはないけれど、新年最初のご法座を迎えさることにやはり感慨があります。本年も皆さまと共ににおおらかに和やかに勤めていきたいと思っています。

紅梅が満開です。



今年もゆっくりとお参り下さい。

心にとまった言葉

元気出せ！ねえちゃん  
道ですれ違った  
おっちゃん

真宗大谷派(お東)  
『私が出会った  
大切なひと言』より

\*

病んでわかる  
健康と  
病を知らぬ  
健康と  
健康であることを  
忘れる健康

健康が  
一番というなら  
病の人は  
どうすればいい  
元気も  
病気も

いただいたいのに  
むきあう大事な縁だ

いのちは  
大切と言う人は 多い  
だが  
いのちを  
粗末にしていると  
気づく人は 少ない  
いのちが  
粗末に  
されているのではなく  
いのちに  
向きあう姿勢が  
粗末なのだ

京都仏光寺の門前に  
掲げられた標語より

ローマ法王が、原爆投下直後の長崎で撮影された写真入りのカードを教会関係者に配布されたという。すでにある核保有国の何万発もの核ミサイルをさておいて、あの北朝鮮の核開発をやめさせようとしても道理に合わないと言えようとした、「核なき世界」への強いメッセージであると私は受け取った。■写真とは、あの「焼き場に立つ少年」だ。誰が負わせたのだろうか、亡くなった赤ちゃんをおぶるまだ幼い少年の胸に食い込むような紐、裸足で火葬の順番を待つ姿はその胸を打つ。「少年の悲しみは、噛みしめられている血の滲んだ唇に表れている」という説明が添えられたそうだが、その悲しみは家族を失っただけのものでないと思う。子供であっても、残された家族の死者を弔う「人」としての悲しみ、戦争を仕掛けた国、被曝し敗戦した国をも受け入れた悲しみ、その思いを小さな体の隅々まで直立不動の全身で受け止めているような姿に、日本人の心、日本人の悲しみというもの凝縮されている。■あの少年のような名もなき国民が犠牲になった戦争。被曝のもたらす真実も知らされず、責任の一端までを感じつつ生き抜いてきた時代。誕生日、七五三、成人式などと特別に祝われることのなかったあの時代の家庭が、ちゃんとした「人」を育てていたことを偲ぶとき、「晴れ着がない」、「一生に一度しかない大切な日なのに…」、「詐欺だ」という出来事を「悲しい事件」と表現していいのだろうかと思う。■好き嫌いかかわらず影響を受けた人たちが、どんどん亡くなっていくのを心細く思いながら、戦後生まれで昭和、平成を生かされ、私は6回りの戌、家内は古希になって、この調子でいけば三つ目の時代を迎えさせてもらえるかもしれない。■戦争はもつてのほかだが、「平らかで成る」だけをいい人生だとは思わない。生きる中には思うようにならないことがいっぱい起こる。そんな避けることのできない困難に、その時々出来るように応じながら生かされている今を「これもいいもんだ」と素直に喜ぶ老人になっていこうと思う。写真の少年はその後どのように生きられたのだろうか。 Norimaru